

キリスト教では、イエス・キリストのご降誕を待ち望む期間を「アドベント」と呼びます。アドベントの開始は、十二月二十五日から数えて四週前の日曜日になります。ですから、二〇二四年の場合、十二月一日(日)から十二月二十四日(火)までがアドベント。聖公会ではアドベントのことを「降臨節Ⅱこうりんせつ」とも呼びます。

降臨節に入り、立教小学校の一階ロビーには、全校児童が持ち寄ってくれた、ドングリと松ぼっくりを使って、二年生が生活科の授業で作ったクリスマスツリーが飾られています。松ぼっくりツリーの足元にはポインセチアの鉢植えも置かれています。このポインセチア、別名クリスマスフラワーとも呼ばれています。



クリスマスによく使われる赤・緑・白の色のうち赤は、「イエス様の流した血の色」。緑は、「永遠の命や愛」。白は、「けがれの無い様子」を表します。葉が赤と緑、樹液が白のポインセチアは、まさにクリスマスにピッタリの色の植物なのです。ああ、それなのに

それなのに…。

実のところ、ポインセチアはメキシコのサンナ原産の熱帯植物。そのため、寒さにはからつきし弱いのです。ああ、それでもクリスマス寒空の下、けなげに寒さに震えながら!?飾られているのです。

ポインセチアは元々薬草であったそうで、メキシコの原住民はポインセチアの白い樹液から解毒剤を作っていたのだそうです。

メキシコや中南米に自生しているポインセチアを見つけ、帰国の際にアメリカに持ち帰り普及させたのが、アメリカの初代駐メキシコ公使のジョエル・ロバーツ・ポインセツト氏。ポインセチアの名前は、このポインセツト氏に由来しているのだとか。こうして、ポインセチアはメキシコの薬草から、アメリカのクリスマス花となったという訳です。

ところで、ポインセチアの鮮やかな赤色をしている部分は花ではなくて、花芽を保護するように葉が変化した「苞葉Ⅱほうよう」と呼ばれる部分です。この苞葉が広がった中に見える黄緑色の小さな粒々がポインセチアの本当の花。この苞葉や花の形がベツレヘムの星を連想させるといふことも、クリスマスになくなくてはならぬ植物となった理由のようです。赤い苞葉は、花ではないけれど、花芽を守るためのものなので、花芽がつかないと発達しません。

夏至を過ぎ、夜が長くなっていくことを感じて花芽が出てくるポインセチアはそう、「短日植物」と呼ばれる植物なのです。自然の条件下でもクリスマス頃には苞葉が赤くなってきましたが、これではクリスマス需要に出荷が間に合いません。そこで、人工的に遮光して、太陽の当たる時間を短くして、早く赤く色づくようにしているのです。こんな苦労をして出荷されるポインセチア。クリスマスのはんの一時期だけ華々しいスポットライトを浴びるポインセチア。まさに、「短日植物」の宿命なのでしょうか…。

ちなみに、ポインセチアが日本に伝わったのは明治時代。和名は「猩々木Ⅱしようじよぼうく」と言います。「猩々」は、中国の伝説上の生き物。人面人足で髪が長く、鮮やかな赤い体毛を持ち、犬のように吠え、人語を解し、お酒が大好きと言われています。日本の伝統色である「猩々緋Ⅱしようじよほうひ」という色は、きつとポインセチアの赤に似た色なのでしょうね。

余談ですが、クリスマス頃、これまた花屋さんの店先を飾る「シクラメン」。この花の和名はなんと、「豚の饅頭Ⅱブタノマンジュウ」。花屋さんで「ブタノマンジュウください。」と、したり顔で言われそうで、子どもたちにはとても話せそうにありません…。

(立教小学校校長 田代 正行)